Osaka University Knowledge Archive

Title	基調スピーチレベルの選択とスピーチレベル・シフトの発達：中級日本語学習者と上級日本語学習者の比較
Author(s)	ボイクマン, 総子; 森, 一将
Citation	間谷論集. 2018, 12, p. 1-25
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/89848
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

〈研究論文〉

基調スピーチレベルの選択と スピーチレベル・シフトの発達
——中級日本語学習者と上級日本語学習者の比較——

ボイクマン 総子・森　一将

1．はじめに

丁寧体と普通体、いずれで話すかというスピーチレベルの選択は、話し手と聞き手の上下、年齢差、親疎、ウチ／ソト、場面によって決定され、日本語母語話者にほぼ共通した認識が存在する（鈴木 1997）。そのため、規範とされる言語使用から逸脱した選択を行うと不適切だと見なされかねない。スピーチレベルの選択が学習者にとって困難な学習項目であると言われる（Iwasaki 2010 : MacMeekin 2014 : Marriot 1995 等）のは、上述のように、上下、親疎、場面などの複数の変数を基に総合的に判断して選択しなければならないことに起因するからであろう。

さらに、丁寧体と普通体は常に一方のみ用いられるわけではなく、同一の会話内で混ざって使用されることもある。その際、丁寧体と普通体は無秩序に混ざるのではなく、丁寧体基調か普通体基調かという基調となるスピーチレベルがあり、一定の状況のもと一時的に別のレベルにシフトするという規則性がある。この規則性についての習得も難しく、実際、このスピーチレベルのシフトについて、上級日本語学習者でさえ問題があるとの指摘がある（陳 2004 : 岡崎 2015 等）。

スピーチレベルの選択やシフトにおける学習上の問題点の特定化は先行研究によって解明されつつあるが、習熟度別の発達については、管見の限り、遠山（2006）がスピーチレベルの選択について言及しているのみである[1]。そこで、本稿では、中級と上級の日本語学習者の言語データを比較し、基調となるスピー

チレベルの選択とスピーチレベル・シフトの発達過程を明らかにすることを試みる。

2．先行研究

2－1．スピーチレベルの選択に関する先行研究

学習者による、基調スピーチレベルの選択についての先行研究には、山口(2002) と上仲(2007) がある。山口は、談話完成テストを用いて依頼、断り、謝罪、苦情のデータを計量的に分析し、日本人は「ウチ・ソト」を基準に発話スタイルを選択するのに対し、中国や台湾の上級日本語学習者は「親疎関係」や発話行為の「内容の軽重」を判断材料としている、と述べている。上仲は、中国語を母語とする上級日本語学習者１名の接触場面の自然会話を基にスピーチレベル選択の基準を探り、その優位順位は、「対話相手に対する心的距離」、「社会的上下・役割」、相手のスピーチレベルに合わせて話す「アコモデーションの調整」の順だったと指摘している。これらの研究により、異なる言語コミュニティに属する集団によっても個人によってもスピーチレベルの選択基準は異なることが明らかにされた。

習熟段階が異なる言語データを用いてスピーチレベルの選択を分析した研究には遠山(2006) がある。遠山は、中級前半８名と中級後半から中国語を母語とする上級５名の学習者を比較し、依頼の主依頼（Head-act [2]）の直接性とそのスピーチレベルを検証している。そして、「友人・親しい先生・教授」に応じて、主依頼をどのようなスピーチレベルで行っているのかを調査した結果、親しい先生と教授には丁寧体を用いていたが、友人に対しては３分の１前後、普通体ではなく丁寧体を用いていたとの報告を行っている。このことは、普通体の習得が丁寧体の習得よりも困難であることを示唆している。これにより、相手に応じたスピーチレベルの選択が中級後半以降でも困難なことがわかった。では、習熟がさらに進んだ上級の学習者においては問題がなくなるのだろうか。この点について、本研究では上級学習者のデータも加えて、分析考察を試みる。

２－２．スピーチレベル・シフトに関する先行研究

日本語母語話者の自然会話を分析した結果、丁寧体基調の会話において発話が普通体にシフトするときは、即時的な感情表出や独話的な発話を行うとき（三牧 2000：Okamoto 1999 等）、従属的な情報や背景情報を述べるとき（Ikuta 1983, 2008 等）であり、言語形式上の特徴としては主として「すごい」等の裸の普通体が用いられることが明らかになっている。

陳(2003) は、日本語母語話者の初対面の自然会話をデータとして、丁寧体基調の会話において発話がダ体にシフトしやすい「状況」を整理し、次の８つの状況－１）相手の発話の一部を繰り返す時、２）先取りをする時、３）自己発話に対する補足・例示をする時、４）情報内容の自己訂正を行う時、５）何かを思い出しながら話す時、６）適切な表現を模索する時、７）相手の発話内容に感嘆を示す時、８）自分の心情を吐露する時-を挙げている。更に、陳(2004) は、台湾と中国の上級日本語学習者によるスピーチレベル・シフトを分析し、上述の１）－８）の状況でのダ体へのシフトが学習者では少ないことを指摘している。

上級日本語学習者によるスピーチレベル・シフトの問題点を発話の言語形式とその内容から指摘した研究には岡崎(2015) がある。岡崎は、普通体の発話を、その聞き手目当て性という特徴の有無によって、聞き手目当ての発話であるインフォーマルスタイル（IF，例：すごいね）と、発話の情報内容に意識が向けられているインパーソナルスタイル（IP，例：すごい）の２つの発話にわけて分析している[3]。丁寧体基調の会話において、日本語母語話者は IF をほとんど使用していなかったのに対し、上級学習者には IF の使用が見られたという問題を指摘し、終助詞の付加、上昇音調、疑問詞疑問文といった言語形式による普通体発話は、IF の発話となってしまい、丁寧体基調の会話において IF を用いると、唐突で不適切な発話と解釈されかねないと述べている。

以上の研究は、丁寧体基調の会話における普通体へのシフトであるダウンシフトを扱ったもので、学習者のアップシフト（普通体基調の会話における丁寧体へのシフト）については管見の限り先行研究がない。

３．本研究の背景

３－１．スピーチレベル

本稿のスピーチレベルの定義は、「場面や会話の相手をめぐる話者の認識が表示された言語形式のレベル」（三牧 2013：72）とする。この場合の場面とは、改まった場面、くだけた場面などのフォーマリティーに関わる場面である。類似の用語にスピーチスタイルがあるが、それぞれの言語形式にはより敬意を表すものからよりくだけた雰囲気を表出するものまで改まり度に段階があるため、スピーチレベルのほうがそれを明示的に表していると考え、これを用いる。

各発話のスピーチレベルを決定する言語形式としては文末レベルと語彙レベルがある。文末レベルは丁寧体か普通体かが関わり、語彙レベルには、狭義の敬語の使用・不使用、軽卑語などが関わる。三牧(1989, 2013) は、語彙レベルよりも発話末の「です／ます」の使用・不使用がレベル決定により重要な要素となるが、語レベルにも注目すべきで、特に、狭義の敬語や軽卑語の使用は、スピーチレベルの差異を際立たせるため、スピーチレベルを総合的に論じるときに欠かせないと述べている。宇佐美(2001) も敬語を考慮に入れる重要性を指摘し、Usami(2002) では狭義の敬語を伴う Super-polite forms、敬語なしの Polite forms、Non-polite forms、No-marker の４カテゴリで発話を分類している。

これらの研究を踏まえ、本研究では、聞き手に対する敬意を示す文末の「です／ます」の使用の有無により、大きく丁寧体と普通体の２カテゴリを設定する。そして、狭義の敬語の有無はスピーチレベルの差異に関連するため、述語に敬語が用いられているか否かで丁寧体を Super-Formal level と Formal level に分け、普通体を Informal level とする。そして、後述する三牧(1989, 2013) と佐藤・福島(1998) の研究をもとに、これら３つのレベル（Super-Formal level、Formal level、Informal level）の下にそれより待遇レベルの低いスピーチレベルとして、サブ・スピーチレベルを設け、６カテゴリで発話を分析する（４－２の表２参照)。

サブ・スピーチレベルに関して、三牧(1989, 2013) は丁寧体より「ややスピーチレベルを低下させたスピーチレベル」－本稿の Sub-Formal level に相当－を設定している。しかし、普通体より低いスピーチレベル－本稿の Sub-Informal level －は設けていない[4]。一方、佐藤・福島(1998) は、「ね／よ」の付いた普通

体－本稿の Sub-Informal level －はそれらが付かない普通体よりも待遇レベルが低いと認識されていると指摘している。本研究では、双方の先行研究の成果を統合し、発話を６レベルでカテゴリ化することにした。

談話の基調となるスピーチレベルについては、Usami(2002) が、当該の談話において高頻度に観察されるスピーチレベルは無標で、それとは異なるスピーチレベルが使用された場合には有標の行動となると指摘している。三牧(2013) も同様に、談話において高頻度に用いられるスピーチレベルを「基本スピーチレベル」と名付けている。これらの研究にならい、本研究では当該談話において半数以上の発話が丁寧体、普通体のどちらになるかで基調スピーチレベルを決定する。

３－２．スピーチレベルと、相手との距離・力関係・負担度

Brown & Levinson(1987) は、Face Threatening Act（以下、FTA）の重さによって、ポライトネスに関わるストラテジーが異なると述べている。FTA の重さとは、話し手と聞き手との距離（D)、話し手と聞き手との相対的な力関係（P)、行為にかかる負担度（R）の三つの合算として示される。この FTA の重さの査定はスピーチレベルの選択と関わっている。先行研究では、山口(2002) が、親疎・ウチ／ソトなどの距離（D）と会話内容の負担度（R）によってスピーチレベルの使い分けを分析し、遠山(2006) は、相手との心的距離（D）と社会的距離（P）の２変数によって依頼の Head-act のスピーチレベルを分析している。本研究では、D は親しい間柄に限定し、P が異なる「親しい友人」と「親しい年上」に対する依頼、勧誘、謝罪のロールプレイの会話において、どのようなスピーチレベルが現れるか見ることにした。親しい間柄に限定したのは、フォローアップ・インタビュー（４－３参照）で、親しくなければ依頼や勧誘をしないと答えた協力者が多かったためである[5]。また、日本語社会においては年齢の上下が P の一つとなるため、年齢を P の変数とした。R については、負担度が異なると想定される依頼、勧誘、謝罪の各２会話計６場面（表３参照）を設定したが、統計の結果、R とスピーチレベル選択に関連が見られなかったため、分析から外した。

3－3．研究の目的

以上述べた研究の背景を踏まえ、本稿では、学習者の基調スピーチレベルの選択の発達過程とスピーチレベル・シフトの発達過程を明らかにすることを目的とし、中級と上級の日本語学習者が依頼、勧誘、謝罪の発話において、親しい会話相手との力関係の違いに応じてどのような基調スピーチレベルを選択し、かつ、どのようなスピーチレベル・シフトを行うのかを分析する。

4．研究方法

4－1．調査協力者

調査協力者は、都内の大学に在学する18歳から23歳（平均20.05歳、標準偏差1.47）の大学生20名で、母語は英語、出身地域は様々である。表1は、学生が所属する大学で直近に受けたプレイスメント、または、日本語能力の進捗を測るための診断テスト（プレイスメントテストと内容はほぼ同じ）の結果と、滞日期間来日前の家庭内での日本語使用の有無、性別を示したものである。テストは、漢字、語彙、文法、SPOT[6]、読解、作文からなり、結果は総合的に判断され、学習者は、初級-下、初級-上、中級-下、中級-中、中級-上、上級、超級の7レベルの習熟度に分けられる。本研究の調査対象者は、滞日期間が同じでもその時期は幼少時から大学入学後と多岐にわたること、家庭内で日本語を使用していた者がいることなど幅広い背景を持つが、本研究の目的はスピーチレベルの発達を解明することにあるため、習熟度との関連を分析し、滞日期間等の背景については、分析考察の際、適宜参照することにした。本研究では、中級-中と中級-上の学習者（L01-L10）を中級、上級と超級の学習者（L011-L20）を上級とし、分析する。

比較対照として、過去5年以上首都圏に住んでいる日本語母語話者（J）のデータも適宜用いる。Jは都内のある大学に在学する19歳から21歳（平均年齢19.7歳、標準偏差0.9）の大学生で、男女それぞれ10名ずつ計20名である。

表１　調査協力者：日本語学習者

ID	テスト結果による習熟度	滞日期間	家庭内日本語	性別	ID	テスト結果による習熟度	滞日期間	家庭内日本語	性別
L01	中級-中	2ヶ月	有	女	L11	上級	8ヶ月	無	男
L02	中級-中	1年2ヶ月	無	男	L12	上級	2年2ヶ月	無	女
L03	中級-中	2年2ヶ月	無	女	L13	上級	2年2ヶ月	有	男
L04	中級-中	3年2ヶ月	無	男	L14	上級	3年2ヶ月	無	女
L05	中級-中	3年2ヶ月	無	女	L15	上級	3年5ヶ月	有	男
L06	中級-中	3年2ヶ月	無	女	L16	上級	6年9ヶ月	無	女
L07	中級-中	4年2ヶ月	無	男	L17	超級	3年6ヶ月	無	女
L08	中級-上	2ヶ月	無	男	L18	超級	5年3ヶ月	有	男
L09	中級-上	7ヶ月	有	男	L19	超級	6年8ヶ月	有	女
L10	中級-上	3年2ヶ月	無	女	L20	超級	10年8ヶ月	有	女

４－２．スピーチレベルのカテゴリ

本稿では、発話を実質的な発話と相づち的な発話にわけ（杉戸 1987）、前者を分析対象とした。また、呼びかけ、応答、中途終了は、スピーチレベルが明確ではないため分析対象から外した。文末スピーチレベルは、Usami(2002)、伊集院(2004)、三牧(2013) を参考に表２のようにカテゴリ化した。表中の「+, 0, '」等の記号は三牧(2013) を援用した。「++」は Super Formal、「+」は Formal、「0」は Informal を、「'」はそれぞれのサブ・レベルを示している。

文末のスピーチレベルは、まず、丁寧体と普通体に分けられる。丁寧体を更に、狭義の敬語が用いられる Super-Formal level と、です／ます体のみの Formal level に分け、普通体に対応するものとして Informal level を設ける。それぞれのサブ・スピーチレベルは、表２の (1) (2) (3) (4) の特徴を持つ。(1) (2) (3) は三牧(1989, 2013) によるもので、(4) は本稿で新たに設けた基準である。(1) の終助詞は、国立国語研究所(1951) を参考に、「かな，から，っけ，さ，し，な，ね，もん，や，よ，よね」が現れる場合とした。「から」「し」は本来接続助詞であるが、伊集院(2004) に倣い、これらを末尾に持つ従属句は独立性が高い

ため（南 1993）、後続文が存在しないときと後続発話文との間に因果関係がないときは終助詞相当として扱った。

表２　文末のスピーチレベルのカテゴリ

	スピーチレベル(記号)	文末の言語形式	例，*斜体は謝罪表明の例*
丁寧体	Super Formal level (++)	狭義の敬語＋丁寧体の言い切り	貸していただけますか 申し訳ございません，失礼致しました
	Sub-Super Formal level (++')	(1)「よ」「ね」等の終助詞の付加（文法的に義務的ではない場合） (2)「けど」「が」の付加による婉曲化 (3) 疑問の終助詞「か」の脱落	(1) お借りしてもいいですかね (2) お借りしたいんですけど (3) お借りしてもいいです？ 申し訳ございませんね
	Formal level (+)	丁寧体の言い切り	～です，～ます，～ですか，～ますか すみません，失礼しました
	Sub-Formal level (+')	(1)「よ」「ね」等の終助詞の付加（文法的に義務的ではない場合） (2)「けど」「が」の付加による婉曲化 (3) 疑問の終助詞「か」の脱落 (4) 縮約形などの文末部分の音韻変化等	(1) ～ですね，～ますから，～ますし (2) ～ですけど，～ますが (3) ～です？，～ます？ (4) いいっす すみませんね，すんません
普通体	Informal level (0)	普通体の言い切り（一語、名詞や形容動詞の語幹で終了している文を含む）	行く，すごい，学生 ごめんなさい，ごめん，申し訳ない
	Sub-Informal level (0')	(1)「よ」「ね」等の終助詞の付加（文法的に義務的ではない場合） (2)「けど」の付加による婉曲化 (3) 疑問の終助詞「の」の付加 (4) 縮約形などの文末部分の音韻変化等	(1) (2) ～かな，～から，～っけ，～けど，～さ，～し，～な，～ね，～もん，～や，～よ，～よね (3) ～の？ (4) こぼしちゃった ごめんね，すまん，悪い

一発話ずつのスピーチレベルのコーディングは、筆者の一人ともう一人の協力を得て行った。25%（５名分）のコーディングの信頼度（κ係数）を測定したところ .945 であった。信頼度が確かめられたため、残りは筆者の一人が行った。

４－３．データ収集方法

本研究では、即時的な反応のデータが得られ、同じ状況の発話データが抽出できるデータ収集方法として会話の結末を一定にしたクローズド・ロールプレイ（以下、closed-RP）を用いた。会話場面は、大学生が遭遇しそうな場面を想定した。それぞれの会話の内容は表３の通りである。「２相手（親しい年上と親しい友人）×６内容」の合計 12 場面を分析対象データとし、下記の（1）に示すような英語で書かれたカードを研究協力者に一枚ずつ提示し、筆者の一人が会話相手（調査者）となり、closed-RP を行った。このとき、調査者は協力者が会話を進めるための最小限の返事やあいづちだけを行い、結末は常に相手の依頼や勧誘、謝罪に承諾するものとした。ただし、協力者には筋書きは知らせていない。

（1）は親しい友人にペンを借りるよう依頼する場合のカードである。親しい先輩の場合は、下線部を「同じクラブに属する親しい年上の人」に置き換えた。ロールカードの提出の順番は協力者ごとにランダムに提示した。対話の相手の名前は女の友人の場合は「ユミ」、男の友人の場合は「ケン」とし、先輩は「前田」、対話相手である調査者は同性であると仮定した。J に対しては日本語で書かれたカードを用いて同様の方法でデータ収集を行った。

表３　発話行為と会話内容

発話行為	その場	その場ではない
依頼	(1) ペンを借りる	(2) 高額の本を借りる
勧誘	(3) 喫茶店に誘う	(4) お茶会に誘う
謝罪	(5) コーヒーをこぼす	(6) 高額の本をなくす

(1) You are at the University library. You want to write down the names of books in your notebook for a paper. But you forgot to bring a pen. You see your best friend sitting close by. You want to borrow a pen from him/her. What would you say?

データはICレコーダーに録音し文字化した。closed-RP後に調査協力者に対しフォローアップ・インタビューを行い、相手と会話内容に応じて何か気をつけたことがあるか、学習者には英語で、Jには日本語で質問した。

5．スピーチレベルの選択

スピーチレベルの選択について中級と上級の言語データを比較し、その結果を見ていく。学習者の発話は、計1213発話で、うち中級は564発話、上級は649発話だった。スピーチレベルの全体的な傾向としては、図1に示すように中級と上級で差が見られた（χ^2=937.71, df=5, p<0.01）。

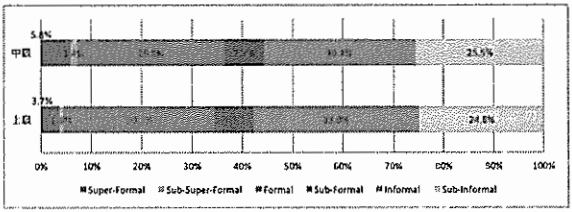

図1　習熟別スピーチレベルの割合

5－1．力関係による基調スピーチレベル

親しい友人に丁寧体を使う割合（図2）は、上級は5.5%なのに対し中級では12.0%見られ、有意な差が見られた（t=-2.8639, df=278, p<0.05）。尚、Jが親しい友人に丁寧体で発話する割合は、わずか0.65%だった。

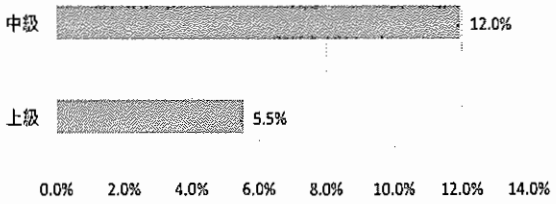

図2　友人に対する丁寧体の使用率

基調スピーチレベルを習熟別にみると、上級では友人に対する基調スピーチレベルは全て普通体だったのに対し、中級では６場面全てで友人に対して丁寧体基調の会話が観察された。その会話数の割合は 21.7%（13/60 会話）で、中級 10 名のうち６名（L04, 05, 06, 07, 08, 10）がそれを行っていた。尚、この６名の日本滞在期間、家庭内での日本語使用の有無と、友人に対する丁寧体の使用とに関連は見られなかった。

次に、親しい先輩に普通体を使う割合は、上級は 4.9% だったのに対し、中級では 11.1% 観察された（t=-3.4311, df=318, p<0.01）（図３）。尚、J ではわずか 0.97% だった。

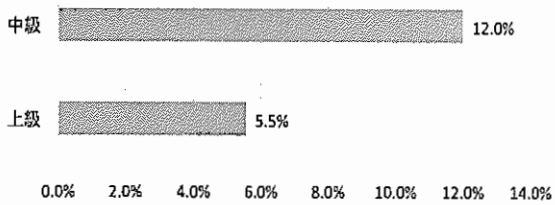

図３　先輩に対する普通体の使用率

先輩に対する会話で基調となるスピーチレベルが普通体になっていたのは、J と同じく、上級では皆無だった。それに対し、中級では６場面すべてに見られ、割合は 18.3%（11/60 会話）、中級 10 名のうち６名（L01, 03, 06, 08, 09, 10）によるものだった。また、この６名の滞在期間や家庭内での日本語使用は多様だった。フォローアップ・インタビューで学習者 20 名全員が、親しい友人にはカジュアルに話し、先輩には親しくても丁寧に話すほうがいいと述べていたことを考えると、中級では、この認識が実際の言語使用に反映されていないことになる。

基調スピーチレベルの選択についてまとめると、中級では 10 名中９名に、そして、丁寧体基調の会話、普通体基調の会話双方で、自らの認識と基調スピーチレベルの選択に齟齬が見られ、上級には齟齬が見られなかった。このことから、習熟度が基調スピーチレベルの使用に影響を与えていると言えそうである。

５－２．サブ・スピーチレベル

本節では、学習者の Head-act とその他の発話（Others）、及び、謝罪表明の発話である IFID[7] と Others のサブ・スピーチレベルの出現について概観する。尚、

依頼と勧誘のHead-actは計750発話中40発話（Othersは710発話）で、IFIDは計436発話中199発話（Othersは237発話）だった。

参考データとして、Jでは依頼と勧誘のHead-actにおけるサブ・スピーチレベルよりもOthersにおけるサブ・スピーチレベルの出現割合が高かった。つまり、主依頼（例：～てもらえませんか）や主勧誘（例：～ませんか）の発話であるHead-actは、言い切りで明確に述べられていたのに対し、Othersは終助詞などがついた発話であるサブ・スピーチレベルが用いられていたということになる。学習者の場合も同様の傾向が見られたが、習熟度別に見ると、Othersでのサブ・スピーチレベルの一会話あたりの平均出現回数は中級より上級のほうがSub-Formalは倍、Sub-Informalは上級が2.53回、中級が1.45回と上級のほうが多い（図4，5）。

謝罪においても、JではIFIDよりOthersにおけるサブ・スピーチレベルの出現割合が多かった。学習者の習熟度別に比較すると、Othersにおけるサブ・スピーチレベルの一会話あたりの平均出現回数は上級のほうが中級よりも多かった（図6，7）。

サブ・スピーチレベルの出現が中級よりも上級で多いという傾向は、終助詞などのついたサブ・スピーチレベルの発話のほうが、終助詞などの付かない言い切りの発話よりも複雑であるという、日本語能力に関わる問題と関連すると考えられる。MacMeekin(2014）は、普通体は、裸の形式からinteractive devices（本稿のサブ・スピーチレベルに相当する）が付加した形式へと発達することを推察しているが、本データの結果はその証左になろう。

ただし、使用数が多ければいいというわけではなく、不適切な言語行動と見なされる可能性のあるサブ・スピーチレベルの使用には注意が必要で、丁寧体基調の会話におけるサブ・スピーチレベルの発話がそれに当たる。例えば、母語話者が「ね／よ」のついた普通体発話を丁寧体基調の会話でほとんど用いていない（伊集院(2004)）のは、その発話が聞き手目当てのIFの発話になってしまうからである。皮肉なことに、習熟度が低い学習者は、終助詞などの付いた複雑なサブ・スピーチレベルの発話を行わないため、Jと同じようにIPの発話（裸の普通体の使用）を行うと考えられ、問題が生じることは少ないと予想される。と

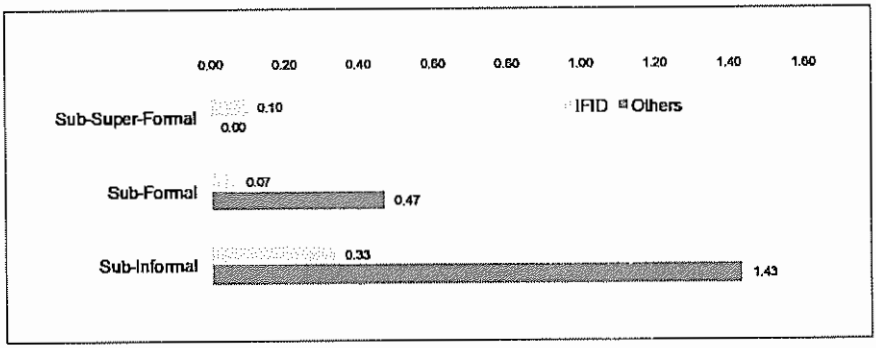

図６　上級の謝罪における一会話あたりのサブ・スピーチレベル平均出現回数

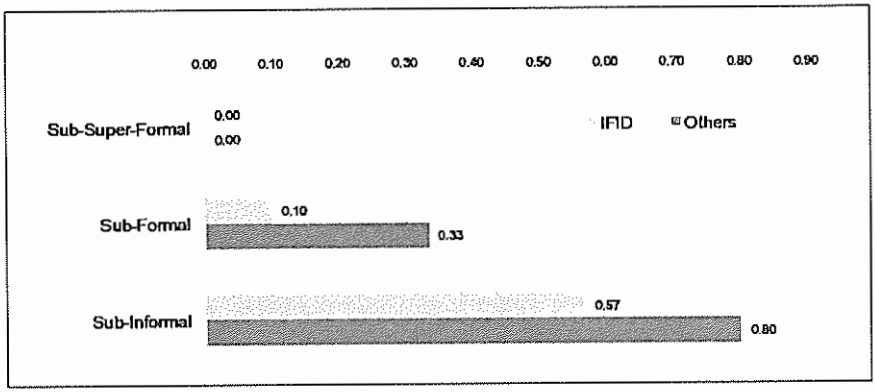

図７　中級の謝罪における一会話あたりのサブ・スピーチレベル平均出現回数

ころが、日本語能力が上がり、サブ・スピーチレベルを使いはじめたものの、状況に合わせた適切な使い分けができるほどのレベルには達していない場合に問題が生じやすくなる。このことを表しているのが、IFID におけるサブ・スピーチレベルの出現回数とその使用状況である（図６，７）。サブ・スピーチレベルの出現は全体として上級の方が多いのだが、IFID だけを見ると、サブ・スピーチレベルに関しては Sub-Formal と Sub-Informal では上級よりも中級のほうが出現数が多いという逆転が起こっている。それらの発話を見たところ、先輩に対してサブ・スピーチレベルで IFID の発話を行っていたのは中級のみだった（L06 によ

る「すみませんね」１回、L05の「ごめんなさいね」２回)。このような、丁寧体基調の会話でのサブ・スピーチレベルの発話（IF）は、距離を縮める効果があるというより真剣に謝っていない印象を与えかねない。

まとめると、サブ・スピーチレベルの使用は、中級よりも上級の方が多く使用していたことと、語用論的に問題となるサブ・スピーチレベルの発話を行っていたのは、中級の学習者であることがわかった。

６．スピーチレベル・シフト

６－１．普通体基調の会話（対友人）における丁寧体発話：アップシフト

学習者のデータを見る前に、参考データとして、Ｊによるアップシフト－普通体基調の会話における丁寧体発話－を見ておきたい。Ｊの親しい友人に対する総発話数は769で、うち丁寧体発話（アップシフト）は５発話みられた。うち３発話は、「依頼－本を借りる」場面で、それまで普通体で話していたが、本を貸してもらえることがわかった後、会話の終了部で依頼の定型表現「よろしくお願いします」を丁寧体で発話するというものだった。他の２発話は「勧誘－お茶会に誘う」会話で、勧誘が受け入れられて会話の終了部で「是非来て下さい」と丁寧体で述べる発話と、勧誘の前置きとして「来週の日曜日空いていますか」と丁寧体で尋ねる発話だった。「よろしくお願いします」や「是非来て下さい」は、アップシフトすることによって改まって依頼や勧誘をしているという態度を示すことになる。また、勧誘の前置き質問の「来週の日曜日空いていますか」を丁寧体で行うことは、この場合、相手よりも話し手の方により好ましいと考えられる言語行動（勧誘）であるため、注意深く相手にアプローチしているという態度を示すことになる。いずれもアップシフトは必須ではないが、有標の言語行動を行うことにより、話し手の態度の変化を指標する意味がある。

では、学習者の場合はどうだろうか。学習者が行った親しい友人に対する会話で基調スピーチレベルが普通体ではなく丁寧体にであったのは、60会話中13会話あり、いずれも中級の学習者９名によるものだった。本節は、アップシフトを分析するという目的のため、この13会話を除き、基調スピーチレベルが普通体の47会話（中級17会話、上級30会話）に見られたアップシフトについて分

析する。上級のアップシフトは4名（L12, 14, 17, 18）によるもので、計16発話だった。このうち、Jと同じく、会話の終了部で依頼の定型表現「よろしくお願いします」と述べる発話は5発話だった（会話例（2））。残る11発話はL12とL17によるもので、会話の途中で唐突にアップシフトする発話が2発話、他9発話は、会話例（3）に見られるように、会話の途中で唐突にアップシフト（「あいいですよ」）し、そのままアップシフトが続き、基調レベルの普通体（「ありがとう」）に戻るのが遅れるというものだった。

(2)「依頼ー本ー友人」（上級）[8]

L18　ちょっと貸してもらってもいい？(0)

I　あーいいよいいよ.

L18　ありがとう.(0)

I　えっとーどうしよう今持ってないけど明日持ってくるね.

L18　**あーじゃあお願いします.(+)**

(3)「依頼ーペンー友人」（上級）

L12　ごめん.(0) 私今日ペン持って来るの忘れたんだけど.（0）[うんうん]
貸してくれる？（0）

I　あいいよ．あのーこれでいい？

L12　**あいいですよ.(+')　お願いします.(+)　後で返しますから.(+')**

I　はーい.

L12　ありがとう.(0)

一方、中級学習者のアップシフトは、計25発話あり、7名（L02, 03, 04, 05, 07, 08, 10）によるものだった。いずれも次の例（4）に示すように、普通体の発話の中に丁寧体の発話が無秩序に出現していた。例（4）では、丁寧体の発話「今度の日曜日空いていますね」の次に「茶道を一緒に参加しない？」という普通体の発話を行い、また、丁寧体「行わるそうです」にアップシフトしていた。このような一貫性のない不安定なスピーチレベルの選択は中級にのみ観察され

た。

(4)「勧誘ーお茶会ー友人」（中級）

L04 あっ健さん.［うん］**今度の一日曜日一空いていますね？**(+')

I うんうん.

L04 あっ茶道を一緒に参加しない？(0)

I あっえーと何？日曜日の一いつ？何時？

L04 **あっ三．午後の三時から一五時一まで**［ああー］**し渋谷にある一．あ**［うん］**先生の家で**［うん］**行われて．行わる．**［うん］**そうです．**(+')

６－２．丁寧体基調の会話（対先輩）における普通体発話：ダウンシフト

Jが先輩に対して普通体を使ったダウンシフトの発話数は計762発話中27発話で、うち20発話は「ごめんなさい」だった。ここでは「ごめんなさい」を除く7発話についてみていく。7発話のうち5発話は、「相手の発話内容に感嘆を示す時」（陳2004）の発話だった。具体的には、依頼や勧誘、謝罪が受け入れられて「よかった」、「やった」等と述べる発話だった。残り2発話は「謝罪 - コーヒーをこぼす」で、先輩に「こぼしちゃった」、「やっちまったな」等と述べるもので、「自分の心情を吐露する時」（陳2004）に相当する。このように、Jによるダウンシフトは、「ごめんなさい」以外は、いずれも話者の感情を表出するもので、独り言のように聞こえるIPの発話であるという特徴が見られた。

上級学習者は、Jと同じく、先輩に対しては全ての会話が丁寧体基調の会話だったが、中級では30会話中11会話で普通体基調の会話が見られた。本節では、ダウンシフトを分析するという目的のため、この11会話を除く中級学習者による19会話と上級学習者による30会話において観察されたダウンシフトの発話について見ていく。上級学習者によるダウンシフトは、13発話あり、うち、10発話は「ごめんなさい」で、残り3発話は、陳(2004)の「相手の発話内容に感嘆を示す時」（会話例（5））と「何かを思い出しながら話す時」（会話例（6））だった。これは、Jと同じくダ体にシフトしやすい状況の下でのダウンシフトで、その言語形式も聞き手目当て性のないIPの発話だった。しかし、残りの1

発話（会話例（7））は、聞き手目当て性のあるIFの発話だった。「前から聞いてたんだけど」というこの発話は、「親しくても年上に対しては丁寧に話す」という学習者自身の認識とずれている。

(5)「勧誘ーお茶会ー先輩」（上級）

L12　いえ渋谷ですので.(+)[あそっかそっか] うん.

I　えーと日曜日ーあー日曜日の午後だったらうん. 時間空いてるし面白そうだし行くよ.

L12　よかったー.(0)ではー[うん]あのー.一応住所. 後で連絡しますので[うんうんうん]それから調整しましょうね.(+')

(6)「勧誘ーお茶会ー先輩」（上級）

L11　ハチごうが一番えーとべん便利な.待ち合わせどころなんですね.(+')

I　あー何時ごろ行ったらいいかな.

L11　たぶん. えっと二時半ーぐらいかなー.(0')

(7)「勧誘ーお茶会ー先輩」（上級）

L17　えと前田先輩.[うんうん]えっとー前から聞いてたんだけど.(0')[うん]ちょっと茶道に興味があるってことはな. ってこと本当ですよね.(+')

他方、中級学習者のダウンシフトは30発話あり、うち6発話は「ごめんなさい」だった。残る24発話のうち2発話は「自分の心情を吐露する時」だったが、22発話は、「ダ体にシフトしやすい状況」（陳 2004）ではなく聞き手目当てのIFの発話で、例（8）に見られるように会話の途中で唐突にダウンシフトしていた。

(8)「依頼ー本ー先輩」（中級）

L02　あのー前田先輩.あのー[うん] ジャパンズエコノミーっていう本があのー使いたいのだけど.(0')あのー借りてもーいいですか？(+)

I　あーうんいいけどー今持ってないよ.

L02　あじゃああのーひまだっひまなときにあのー[うん]借りてもいい？(0)

I　あうん. 明日じゃあ持ってくるね.

L02　あじゃあお願いします.

会話例（8）のL02は、「借りてもーいいですか？」と丁寧体の発話をしているにも関わらず、次の発話では「借りてもいい？」と普通体を用い、その次の発話では「あじゃあお願いします」とまた丁寧体に戻っている。この「借りてもいい？」という発話は相手の許可を伺うもので、聞き手目当てのIF発話である。このように聞き手目当て性のある発話をダウンシフトさせることは、失礼な言語行動であると受け取られる可能性がある。

ここまで見てきたスピーチレベル・シフトの状況を習熟度別にまとめると、アップシフトに関して、上級では、Jと同じく有標のスピーチレベルを発話することで、話し手の心的態度の変化を示すシフトが見られた。他方、中級の場合は、普通体基調の会話に丁寧体の発話が唐突または交互に混ざるという現象が見られ、普通体の発話を使い続けることができないという問題が見られた。上級においても一部の学習者はアップシフトを突然行うという現象が見られたが、その場合、普通体と丁寧体が交互に混ざるのではなく、一端丁寧体になり基調スピーチレベルの普通体に回帰するのが遅れるというものであった。

ダウンシフトについては、ダウンシフトしやすい状況の下、聞き手目当て性のない言語形式で発話しなければならないという制約がある。上級学習者は例外はあるものの、そのような制約に応じた言語形式でのダウンシフトを行っていたが、中級の場合はほとんどが聞き手目当て性のある発話形式によるダウンシフトで、会話の途中に唐突に出現していた。この中級学習者のダウンシフトは、基調スピーチレベルをコントロールしきれていないことによるものと考えられる。

7．考察

5節と6節の結果を踏まえ、本節では、習熟が進めば、語用論的により適切なスピーチレベルが選択やシフトが行えるようになるのか、という問いに応えた

い。

基調となるスピーチレベルの選択について、中級では、自らの認識と齟齬のある基調スピーチレベルの選択が見られた。教室では、通常丁寧体の後、普通体が導入されるという順序で学習が進む。本データの学習者も教室で日本語を学習した／しているため、丁寧体を使い続けることの方が容易なはずである。ところが、丁寧に話す方がいいという認識を持っている年上（先輩）に対する会話においてさえ、普通体基調の会話をしてしまうという問題が中級のみに見られた理由としては、本データの学習者が中級といっても初級終了直後の中級学習者ではなく、丁寧体と普通体、両方のスピーチレベルが基本的に使える程度の習熟度であったことが影響していると考えられる。すなわち、普通体を発話することができず、丁寧体しかできないレベルであれば、年上に対して、普通体の基調スピーチレベルは現れることがなかっただろう。両方がある程度使えるが、完全にコントロールできない習熟度であるからこそ、年上に対し自らの規範認識とは異なる普通体基調のスピーチレベルが用いられたものと推察できる。また、丁寧体基調のスピーチレベル選択に関して問題のなかった会話においても、学習者のダウンシフトを見ると、中級では、聞き手目当て性のある発話（IF）による不適切なダウンシフトが散見された。これについても、丁寧体と普通体をコントロールできるほどの習熟度に達していないことがその要因だと考えられる。

基調スピーチレベルが普通体の場合も同じく、習熟度が低ければ慣れている丁寧体を使ってしまうということになろう。普通体基調の会話に見られたアップシフトの実態を見てみると、中級学習者の場合は、丁寧体と普通体が交互に現れるという無秩序なシフトが見られたが、これは普通体を使用し続けることに困難をきたしていることが原因だと考えられる。一方、上級では、アップシフトした後に基調スピーチレベルに戻るのが遅れていた。丁寧体を使用するときには丁寧体を使い続けるという基調スピーチレベルに関する感覚が上級では身についており、そのことが基調スピーチレベルへの回帰の遅れにつながったと考えられる。

では、次に、習熟が進むほど出現が多く見られたサブ・スピーチレベルの使用は、丁寧さに関する適切な言語行動とどのような関係にあるのか考えたい。サブ・スピーチレベルは、習熟が進むほど使用が多くなる傾向にあるため、サブ・

スピーチレベルを用いない方が適切な言語行動となるIFIDやダウンシフトにおいては、サブ・レベルの発話ができない学習者のほうが、語用論的に適切な発話を行うことになる。例えば、MacMeekin(2014）は、中級初期の学習者が裸の普通体でダウンシフトを行った例を挙げているが、習熟度が低いため却って語用論的に適切な形式でダウンシフトができた可能性がある。ところが、習熟が幾分か進み、サブ・スピーチレベルの発話はある程度できるが、状況に合った適切な言語形式についての知識がなかったり、知識はあっても制御して使えなかったりする場合、語用論的に不適切な発話を行ってしまうと考えられる。このことは岡崎(2015）にも指摘があり、本データの中級学習者のサブ・スピーチレベルの不適切な発話は、この証拠となるだろう。

8．まとめ

本データの結果から、丁寧体を普通体よりも先に学習した日本語学習者の基調となるスピーチレベルの選択とスピーチレベル・シフトは、次のような発達過程を経るものと仮定できる。

【基調スピーチレベル】最初は、普通体が発話できないため、丁寧体基調の会話だけができる。次に、普通体基調の会話もある程度できるようになるが、その場合、丁寧体を混ぜて使う傾向がある。第3段階としては、自らの認識と合致した2つの基調スピーチレベルの会話がある程度行えるが、双方を完全に制御できるほどの能力に達していないため、自らの認識とは異なる基調スピーチレベルで会話を行ってしまうことがある。そして、習得が進むと、最終的には、自らの意識と齟齬のない2つの基調スピーチレベルが使い分けられる。

【スピーチレベル・シフト】最初は、丁寧体しか使えないため、シフトは起こらない。次第に、普通体基調の会話における無秩序なアップシフトが見られる。ただし、ダウンシフトについては、複雑な言語形式のサブ・スピーチレベルが発話できないことで却って適切なダウンシフトができることがある。第3段階としては、無秩序で語用論的に不適切なアップシフトだけでなく、不適切なダウンシフトも行ってしまう。次に、会話の途中で一端シフトすると、もとのスピーチレベルに回帰するのが遅れることがあるが、不適切なサブ・スピーチレベルの使用

が減り、語用論的に適切なスピーチレベル・シフトができるようになる。

以上、本研究では、中級と上級の学習者グループの依頼、勧誘、謝罪の言語データを比較し、会話相手との力関係によって基調となるスピーチレベルの選択とシフトがどのような発達を遂げるのかを分析考察した。

本研究によってスピーチレベルの発達の一端が明らかになったものと思われるが、本稿で述べた発達段階は本データから得られた結果をもとにした仮説であり、スピーチレベルの発達を実証するには、初級を加えた検証が課題である。さらに、本研究では一括りにまとめて分析考察したサブ・スピーチレベルの一つ一つの言語形式について、綿密に検証を行う必要がある。

注

1 近年「留学」によるスピーチレベル・シフトの習得の研究に関心が集まっている(Iwasaki 2010 : MacMeekin 2014 : Marriot 1995 : 等)。しかし、これらは日本滞在が JFL 学習者の習得を促したかどうかに研究の焦点があり、習熟度による発達を対象にした研究ではない。

2 Head-act とは、当該の発話行為を実現させる最小限の発話で、依頼であれば「お願いをする」発話のことを指す(Blum-Kulka, House & Kasper, 1989)。

3 IF、IP という用語は Maynard(1991) を踏まえ、Cook(2002) が提唱したものである。

4 三牧(1989, 2013) は丁寧体よりも改まったレベルとして「ございます体」を設定している。

5 データ収集時には「教授」も含めていたが、本稿の分析では「教授」のデータを除外した。フォローアップ・インタビューで、多くの学習者と日本語母語話者が、教授には勧誘を行わないし、何かを借りることもしないと答えたためである。

6 SPOT とは、文法能力を測るためのリスニングによるテストである(小林他 1996)。

7 IFID (Illocutionary force indication device) とは、その発話を聞けば謝罪であることが即座にわかる謝罪の定型表現のことある(Blum-Kulka, House & Kasper, 1989)。

8 会話例で用いた記号等について、J は日本語母語話者、L は学習者、I は調査者、数字は ID である。注目すべき発話はゴチック体にし、相づちは[ ]に入れた。【.】は下

降イントネーション、【？】は上昇イントネーションである。

参考文献

伊集院郁子(2004)「母語話者による場面に応じたスピーチスタイルの使い分け―母語場面と接触場面の相違―」『社会言語科学』vol.6 No.2, pp.12-26

上仲淳(2007)「中国語を母語とする上級日本語学習者のスピーチレベルの選択基準」『大阪大学言語文化学』16, pp.141-154

宇佐美まゆみ(2001)「ディスコース・ポライトネス」という観点から見た敬語使用の機能：敬語使用の新しい捉えかたがポライトネスの談話理論に示唆すること」『語学研究所論集』6, pp.1-29

岡崎渉(2015)「上級日本語学習者による普通体へのスタイルシフト：インフォーマルスタイルに着目して」『広島大学大学院教育学研究科紀要.』第2部 第64号, pp.147-156

国立国語研究所(1951)『現代語の助詞・助動詞―用例と実例―』国立国語研究所

小林典子・フォード丹羽順子・山元啓史(1996)「日本語能力の新しい測定法『SPOT』」『世界の日本語教育』6, pp.201-236

佐藤勢紀子・福島悦子(1998)「日本語学習者と母語話者における発話末表現の待遇レベル認識の違い」『東北大学留学生センター紀要』4, pp.31-40

杉戸清樹(1987)「発話のうけつぎ」『国立国語研究所報告92 談話行動の諸相―座談資料の分析―』三省堂, pp. 68-106

鈴木睦(1997)「日本語教育における丁寧体世界と普通体世界」田窪行則（編）『視点と言語行動』くろしお出版, pp.45-76

陳文敏(2003)「同年代の初対面同士による会話に見られる「ダ体発話」へのシフト――生起しやすい状況とその頻度をめぐって」『日本語科学』14, pp.7-28

陳文敏(2004)「台湾人上級日本語学習者の初対面接触会話におけるスピーチレベル・シフト――日本語母語話者同士による会話との比較」『日本語教育論集』20, pp.18-33

遠山千佳(2006)「第二言語社会における丁寧さ・親しさの表現の発達：日本語学習段階による「主依頼」表現の変化から」『神田外語大学紀要』18, pp.235-259.

山口和代(2002)「ポライトネスに応じた言語形式と人間関係の認知―中国人ならびに台湾

人留学生と日本人母語話者との比較の視点から―」『社会言語科学』5-1，pp.75-84

南不二男(1993)　『現代日本文法の輪郭』大修館書店

三牧陽子(1989)　「待遇レベル・シフトの談話分析」『AKP 紀要』3，pp.34-50

三牧陽子(2000)　「丁寧体基調の談話にみる独話的発話・直接引用・心情の直接表出―「働きかけ方式」のポライトネス・ストラテジーとして―」『大阪大学留学生センター研究論集多文化社会と留学生交流』4，pp.33-49

三牧陽子(2013)　『ポライトネスの談話分析：初対面コミュニケーションの姿と仕組み』くろしお出版

Blum-Kulka, Shoshana, House, Juliane & Kasper, Gabriele (1989) *Cross-cultural Pragmatics: Requests and Apologies*. Norwood, NJ: Ablex.

Brown, Penelope, & Levinson, Stephen (1987) *Politeness: Some Universals in Usage. Cambridge University Press*, Cambridge.

Cook, Haruko. M (2002) The social meanings of the Japanese plain form. In Akatsuka, N., & Strauss, S. (Eds.), *Japanese/Korean linguistics*, Vol. 10, Stanford, CA:CSLI, Publications pp.150-163

Ikuta, Shoko (1983) Speech level shift and conversational strategy in Japanese discourse. *Language Sciences*, 5, pp.37-53

Ikuta, Shoko (2008) Speech style in shift as an interactional discourse strategy: The use and non-use of desu/masu in Japanese conversational interviews. In Kimberly, J., & Ono, T. (Eds.) *Style Shifting in Japanese*, Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins, pp.71-90

Iwasaki, Noriko. (2010) Style shifts among Japanese learners before and after study abroad in Japan: Becoming active social agents in Japanese, *Applied Linguistics*, 3, pp.45-71

Marriott, Helen (1995) The acquisition of politeness patterns by exchange students in Japan. In Freed, B. (Ed.), *Second Language Acquisition in a Study Abraad Context*. Amsterdam: John Benjamins, pp.197-224.

McMeekin, Abigail (2014) Japanese learners indexical uses of the da style in a study abroad setting. *Japanese Language and Literature*, 48, pp.1-38.

Maynard, K. Senko (1991) Pragmatics of discourse modality: A case of da and desu/masu forms in Japanese. *Journal of Pragmatics*, 15, pp.551-582.

Okamoto, Shigeko (1999) Situated politeness: Manipulating honorific and non-honorific expressions in Japanese conversations. *Pragmatics*, 9-1, pp.51-74

Usami, Mayumi (2002) *Discourse Politeness in Japanese Conversation; Some Implications for a Universal Theory of Politeness*. Tokyo: Hitsuzi syobo.

付記

本研究は、科学研究費助成事業・基盤C・課題番号16K02798「日本語学習者の留学における語用論的能力の習得に関する研究」（研究代表者 ボイクマン総子）、および、基盤C・課題番号16K01058「AO方式選抜に対応した合否判定支援システムの開発」（研究代表者 森一将）の助成を受けている。

〈キーワード〉 スピーチレベル　基調スピーチレベル　スピーチレベル・シフト

ボイクマン フサコ（東京大学）・モリ　カズマサ（文教大学）

Development of speech level base and speech level shift: A comparison between intermediate learners and advanced learners of Japanese

BEUCKMANN Fusako and MORI Kazumasa

The aim of this study is to identify the developmental process of speech level base and speech level shift by comparing ten advanced and ten intermediate adult learners of Japanese. We used closed role-play to elucidate request, invitation and apology, and analyzed each utterance within the six speech levels.

Data analysis revealed that the development of speech level base evolves through the following stages: 1) only polite speech level base can be used, 2) plain speech level base appears, however, polite speech level base is dominant, 3) both polite and plain speech level bases can be used, however, not precisely controlled, 4) there are no gaps between speaker's perception and usage of speech level base.

Developmental steps of speech level shift can be illustrated as follows: 1) no shift, 2) haphazard up-shift, 3) haphazard up-/down- shift, 4) delay in re-turning to the speech level base after a speech shift, 5) accomplishment of pragmatically appropriate speech level shift.

Until now little attention has been paid to the developmental process of speech level. The result of this study, however, sheds light on how learners of Japanese acquire speech level base and speech level shift.